

文化

沈黙に向き合う

沖縄戦聞き取り47年

石原 昌家

(37)

現代の国家が民衆を操作するもつとも有効な手段のひとつは、学校教育である。その教育現場で使用される教科書が、国家にとって特別な存在であることは、帝国日本における軍国教育、皇民教育が、国民を戦場へ駆り立てていったことでも明らかである。

政府は「戦争放棄」を謳う憲法をもつ日本人に、「有事」にそなえた法整備の下準備のひとつとして、教科書記述をおおして「軍官民」

執筆 石原昌家

82年6月26日「毎日新聞」が教科書検定で文部省(現文部科学省)の指示により沖

沖縄戦史実を抹殺

県史「研究書でない」

教科書検定で文部省(現文部科学省)の指示により沖

東京タイムズ

THE TOKYO TIMES

高校「日本史」検定で文部省

日本軍の住民殺害



県史「研究書でない」

教科書問題を1面トップで扱った1982年7月8日付「東京タイムズ」

82年教科書検定事件

「沖縄戦 真実伝えて」

「虐殺」削除に県民抗議

緬戦における日本軍の住民殺害の記述が削除された、と報じた。その第一報以後、沖縄地元紙は、精力的にその問題を報じていく。同時に沖縄教職員組合をはじめとするさまざまな団体がその問題に取り組み始めた。なかでも北中城村議会をはじめ県議会も、臨時議会を招集して「教科書に沖縄戦

の真実を求める」意見書を都圏で発行されていた「東京タイムズ」も同問題を1面トップで扱った。そして、7月10日朝刊の第2社会面で「教科書から沖縄住民虐殺削除」文部省検定の経過/記述そのものを問題視/抹殺された4次修正で「バス」という見出し記事で文部省が執筆していたような圧力をかけていったかを詳細に記している。

沖縄映画史上空前の観客動員だと報じられていた。沖縄戦戦死没者の三十三「回忌」を終え、評判の沖縄戦映画が上映されるといふことで、沖縄戦を生き延びたかたがたの子や孫が「じいちゃん、ばあちゃん」を映画館へ案内した。すると、帰宅するやこれまでの「沈黙」を自ら破り、「自分たちが体験した戦争は、あのようなものでなかったよ」と、初めて子や孫に凄惨な体験を語り始めていた。異口同音に「子や孫に夜遅くまで、体験を話したところだったよ」と語る場面に出会い、聞き取り調査がとて

組 教科書問題で委員会/沖縄戦の虐殺削除 今月中旬にも初会合/見出し記事で、まずは直接の関係者である教職員組合が、この問題に取り組み始めようとしていることを報じている。そして7月8日には、朝刊1面トップ記事に「事実抹殺図る文部省/教科書の沖縄住民虐殺削除/修正経過で鮮明/「検定」の在り方問題化」という大きな見出しで本格的に報道を開始している。同日は当時首

1面でも「沖縄戦と継承/教科書から削除された県民虐殺(一)/第一部 虐殺はあった」「殺害された鹿山/国は遺族20人に見舞金」という見出しで連載を開始している。「教科書検定で、沖縄戦のなかの『日本軍による沖縄住民殺害』が削除された。沖縄戦の最も鋭い矛盾点を教育の場に初めて持ち込もうとした試みを、文部省が阻んだ。文部省はさらに沖縄戦のその他の記

録についてもクレームをつけた。これは、教科書への不掲載という問題ばかりでなく、沖縄戦継承への問題をも改めて提起したと考えられる。沖縄戦と其の継承について洗い直してみた。

以後、各地での日本軍による住民虐殺事件を連載していった。世論を喚起していくうえで、その果たした役割は大きかった。この教科書からの「住民殺害」削除は「有事法制」制定が真の目的だったのであると、いろいろな照会させて後日、私は知ることになった。

戦争生生存者の思い 戦争を生き延びた方々にとって82年は格別な年になった。私は、ゼミ生を連れて、浦添市内で沖縄戦体験の聞き取り調査をしていた。おりしも、今井正監督の映画「ひめゆりの塔」が6月12日に封切られ、当時

(次回4月後半掲載)